五明題集 六

二

和書門
類 二五九八五
號 六九
函 三
架 六
冊

内閣文庫
和書
類 二五九八五
號 六
冊 二
函 二〇一
架

内閣文庫
番號 和 25985
冊數 6 (2)
函號 201 7

綴じ部（喉部分）の文字等が開きが不鮮明な場所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

秋

初秋
早秋
早涼之秋
七夕聟
七夕橋
七夕地儀
萩
萩風
萩風
萩
萩風
萩
萩

初秋月
浦早秋
七夕
七夕聟入
七夕雲
七夕海船
野女郎花
萩
月前萩
野徑萩

初秋月
殘暑
待七夕
七夕船
七夕雲
野女郎花
萩
月前萩
野徑萩

浅草文庫
和學講談所

路傍
草花を詠
月前草花
鄙草花繁
秋植物
稲妻
夕霧
庭草霧
虫
庭虫

刈萱
草花霧深
風後草花
山家草花
故仁秋
霧
秋夕霧
湖庭露
月前霧
寄虫
暁虫

草花
朝草花
鄙草蔓
行路秋花
小雪初
秋霧
湖庭露
月前霧
寄虫
暁虫

月前虫
秋雨
秋鹿
鄙夕庵
月前庵
遠閑庵
秋風
秋山曙
秋夕
相思夕上杯星点蓋思蟬影漏年秋

暁月虫
虫声歌枯
當山庵
秋庵
月前草庵
夕虫庵
鄙夕秋風
秋朝
遠村秋夕

鄙夕虫
庵
鄙鹿
暁庵
暁月夕庵
田庵
故山嵐風
秋月

秋夜
海浦
秋田
紅葉秋
海風月
待月
月前雲
月前松風
月前旅
雨後月

秋雨
秋野
山田
月
暁月
雲間待月
月前風
月前竹風
月前暁雲
山月

海山
秋末
秋視聽
海月
月出山
見月
月前秋風
月前露
雲間暁月
深山月

湖月
野月
野月霧
水上月
池上月
江月
湖月
磯月
海辺月
海上暁月

松月
秋野月
関月
水上秋月
江月
江暁月
湖上月明
浦月
海月
海辺月
拾遺月
海月
海月
月照海辺
雲月漢文

渡月
水辺月
山岳月
関寺暁月
月多重楼
野分
雁
夕初月
八月十五夜
雲間月

名所月
庭月
関寺月
松間月
秋天象
関駒
秋雁
壱所
暁月
澄明月

禁中月
山家月
田家月
月恋
有明月
駒牽
祝月
雲山遠月
籠中月
田上鹿

籬
野寺
湖上暁雲
樓衣
秋樓衣
星樓衣
九月九日
菊籬月
高見前菊
弥生菊句

朝雲
河霧
宵霧
少樓衣
月樓衣
樓衣何雲
霧隔菊
菊
庭菊
菊道多秋
菊酒

山朝雲
海辺雲
野霧
暁雲樓衣
海辺樓衣
樓衣雲
菊
庭菊
菊道多秋
海菊

霜草枯黄若
初見紅葉
思紅葉
枯紅葉
夕折紅葉
紅葉浮水
紅葉流水
紅葉道
菅枯雨
九月盡

野草枯
露深紅葉
紅葉突松
紅葉映月
月照紅葉
紅葉深
菅枯雲
満谷九月盡

紅葉
山紅葉
松間紅葉
夕紅葉
紅葉映水
紅葉為人
仙家紅葉
菅秋
弾秋

續五明題和歌集

秋

初秋

新千

大納言師賢

雲乃うへ月ぞ雲いく秋の内かはるとは

贈従二位為子

彩裕

須磨乃わの月袖よりうつれる浦風も秋とは打さゝやく

弾正尹邦省親王

この夕の風音吹の一方に雲ぬけ出て今朝の秋とは

前中納言通房

雲をゆく月のかゝりに秋やこゝ

後京極摂政前太政大臣

梅が香を風にしられて秋の来る田山の下の夢の路かな

二条法親王寛尊

いとゝまた霧そ立そふ野の原の秋の風

秋きぬと思ひもあへぬ夕暮に

前摂政太政大臣

朝戸あけ宗の軒ゝの萩の露

前摂政

草も木も思ひ乱るゝ秋の初風

二条法親王兼道

吹かゝる身すゝむ風の音聞て関路の秋を思ひ

初秋霧

風

秋きゝて霧立そふ雲の上の月の光まつ萩の上の露

正三位知家

前

こゝの秋の朝の露の袖ぬれて家ゝの秋に

前大納言為家

思ひきや露の袖にかゝるとは千代の初の秋に

侍従為親

前

風吹て天津雲井の秋の月ひとりの光ゝ見

早秋

後漢藏院前

風乃音ハ秋ハ紙ハ袖ハ

白露ハ玉ハ

藻塩山院伺馬

影拾

蟬乃こゑハ

權大納言義淦

影後古

秋ハ

浦ハ秋

侍從伊成

一品法親王法守

殘暑

前中納言定家

風

秋きてもなほ残る風を松の色ハ

影拾

早涼知恋

法皇御製

秋きぬと聞てもなほ残る蟬の羽衣

七夕

風

逢事を夜ハ残ハ

お冬成隆卿

おほかた

前中納言通房

ことの葉ハ

紫式部

七夕歌合、のときあるひと、

大学大夫重家

七夕農業無為の為の祈り

後光明照院前関白太政大臣

年をへぬかゝる恵に七夕の

源義詮朝臣

七夕の心をのしらぬ人はなし

後崇徳院御製

彩子

月はまたよ馬の庭鳥とわく

八条前太政大臣

七夕の夜の月はまた秋の七日の月やこゝん

後西園寺入道前太政大臣

明けぬ夜の月にあこがれつゝ

彩物

久遠の農業の為の七夕の

船橋

天の川かゝるなかの七夕は今宵ぞ

赤人

九重の庭の中央新文の宮の月をかゝ

八道二京祝聖法寺

前大納言忠季

新後拾

鶯後二位為子

花園院御製

中納言兼輔

洞院摂政前右大臣

新續古

七夕

待七夕

津也国道

新千

七夕契

八道二品親王法寿

法皇御製

新拾

前関白左大臣 懐

前大納言経孝

七夕船　　花園院九製

彩子
天川の川の舟出の音ぞ聞く雲の上の人の言の葉

七夕橋　　前中納言公雄

あまの川やたえぬ流れの舟橋の渡りの月の秋の日の

後嵯峨院九製

うつろひの秋の初風吹ぬれば天の川の橋の

七夕草　　花園院九製

妻ぬれの水の上の草の露の流れの

七夕雲　　後八条入道前内大臣

彩緒古
天の川の今の雲の上の雲の余の波の間の

七夕地儀　　民部卿為藤

彩子
天川の水の上の雲の上の雲の

院御製

彩子
天川の川の遠の橋の

七夕後朝　　源重之

彩緒古
夜の明の川の上の月の

早師氏

夜の明の川の上の月の

鄭如郎花　　前大納言實教

風
いくとせの花の盛の春の

詞十　萩

前大納言為定

奇しきは斬るの萩乃うらぶれいつかく風乃なびかん

前内大臣

なびくらし風乃ゆくへと知てこそ嬉しき萩の葉乃露

詞拾　基俊

獨のみなるみ宿よ萩乃上葉乃露乃玉

郷家

月乃宮ゆと萩乃葉しのぎ鳴ん秋ふかくなる庭乃面

寄持流贈左大臣

神垣乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

詞拾　左大臣

秋乃ゆと萩乃葉のて萩奇しきは秋風乃吹

前内大臣　大納言

秋風乃吹しくときは萩の葉乃奇しきこそ乃乃

詞續古　左大臣

萩ゆゑく奇しきこの秋乃杉風を山乃乃思ふ海

八道一京親王永助

妹き宮の秋風乃ゆくよのこゝろとやうく萩乃葉

前大僧正道意寺

故郷乃斬るの萩を秋風乃世乃奇しき神ゆこそ

風

荻風

伏見院御宇

前大納言為兼

影子

吹ぬくるあはれ秋やの夕暮の荻風の音に鹿の声

荻

為兼卿流家

前大納言為兼

影子

霧ふかき袖のうらつゝ秋ぬれて荻の葉の色ことなる

権大納言實俊

影子

荻風のあはれ秋のゆふぐれ荻の葉の色ことなる

駿河三位為子

影子

荻の葉の色ことなる秋の夕暮

前大納言公蔭

影子

九重の内裏の荻の葉の色ことなる秋の夕暮

御剣家

影子

荻の葉の色ことなる秋の夕暮

明魏法師

影子

荻の葉の色ことなる秋の夕暮

従三位雅家

荻の葉の色ことなる秋の夕暮

月前荻

前大納言實世

権大納言實尹

彩格
梅花の香ちる花のさそふ夜の月もかげそへてとや
薄
風
身をこのくるしき前よりなりし花薄まねくとなれとも
二条院王慈道
彩子
霧ふかき野原の隙花薄ほのかに見えし人の袖
源兼氏朝臣
吹ふく野原の花の梢風ふかれぬ袖もなし
照覚門院一条
籬菊
霧ふかき笹原の花の梢風ふかれぬ袖もなし
前大納言雅氏
彩格
御制歌
彩絵
うちなびく袖ふかれぬ花の梢
鄙径薄
源頼之朝臣
彩絵
色深の道のしるべの初花の袖かけ
路薄
源満元朝臣
彩格
しき海の花の袖ふかれぬ
対菊
贈西上人
風
草花
正三位季経
彩絵
夕霧もかすかに文薄の花
従二位家平

[illegible]

権中納言雅縁

草花歌

九条右大臣女

[illegible]

[illegible]

草花歌源

後鳥羽院

[illegible]

権中納言雅経

新続古

[illegible]

朝顔草花

後山本右大臣

新勅撰

[illegible]

永仁前内大臣

新続古

[illegible]

前大納言為氏

月前草花

[illegible]

院御歌

風後草花

従三位親子

[illegible]

彩千　卿草花　大納言師資

白露乃をくとみしらの時雨乃ふるとは

藤原惟成

彩拾　前大納言為氏

時しらぬ雲とやうへし秋の花の下ひもとけるあさ

時草花盤　源理大夫彩雪

鶴の声ふるとはなしに秋の花

彩子　山家草花　後鳥羽院御製

山の端の月の光の秋の花

彩續古　紅葉　源理大夫彩雪

霜ふる神奴花ゝ二葉紅葉

彩子　植物　淳和天皇

霜ふるとき物をうつすとは紅葉

後醍醐院御製

彩拾　文雄　法印隆圓

月の秋をうつすとは紅葉

後嵯峨院御製

彩拾　文雄　法印隆圓

月の秋をうつすとは紅葉

古今秋　後嵯峨院太政大臣

彰傳古

[illegible]

小夜時雨

[illegible]

順徳院御製

[illegible]

稲妻

[illegible]

藤原為秀朝臣

[illegible]

従三位實名

[illegible]

前大納言為家

[illegible]

彰子

[illegible]

秋露

[illegible]

風

[illegible]

九条右大臣女

[illegible]

彰子

[illegible]

夕露

衣笠前内大臣

[illegible]

彰傳古

秋風

[illegible]

秋夕露

前参議雅有

[illegible]

彰子

[illegible]

後伏見院御製

[illegible]

凡

庭草露　　如願法師

ふるさとの誰のこころのよもぎふの庭も海の底と枯れぬる

渉草露　　伏見院御製

新續古

ふるさとやあれぬる庭のあさぢふに露ばかりぬる秋の夜

月前露　　前大納言實明卿

凡

ながらへぬ行末ながき露ぬきて月のみ玉の緒をぬく

出

新拾遺

ひのしたのまちかぬ秋のきりぎりす鳴くこえ遠し

前大納言為氏

鹿出声

柴の戸の人ぞ見えぬる夕暮れの鹿の音ばかり

前中納言定家

鶴

たづの鳴くこえ聞ゆる葦の根の秋の夜ふかき月の入り

桜

白雪ふる春の山の桜花ちりぬる時ぞ人ぞ恋しき

桜

桜咲く春の山の白雪の消えぬる時ぞ人ぞ恋しき

前大納言實明卿

庭雪

新千載

ふるさとの庭の雪のあけぼのの月の光ぞ人ぞ恋しき

法印隆淵

夜雪

ふるさとの庭の雪のあけぼのの月の光ぞ人ぞ恋しき

前右大臣

暁雪

新拾遺

あけぬるか杉の下葉に積もる雪

後鳥羽院御製

月前雪

雪ふるいはくら山のあけぼのの月の光ぞ人ぞ恋しき

永福門院

凡

雪ふるいはくら山のあけぼのの月の光ぞ人ぞ恋しき

藤原宣成朝臣

新拾

長月の空明の月の新しきのめずらしき花

讃人不知

新拾

霧ふかき空なる月の秋の夜

法三位為親

新続古

ふるさと秋の霧より草葉ふかし

曙の法師

新千載

曙月出

雲の霧ふかしらるる野の月

お大納言為世

新拾

野の虫

源持経

新続古

秋ふかき夜のひびきの霧ふかし

虫の声

大蔵卿惟房

新拾

虫の声

いろいろ農ふかしと見

法華経拾

新千

初霜の夜のひかりの虫の声

伏見院御製

鹿

基俊

風ふかぬ神の霜ふる秋の夜

大納言成通

秋もすがら雲ふかいそ神の

彩子

秋風ものすさまじき折ふし、ものいひてつかはしける

入道親王覚誉

彩花物

折ふしもすさまじき秋よりかけてぬる癒をうらやましがる物と庶やすらん

右衛門督資教

彩指

さしのぼるさのつのよりはるかにおもひあはせしかぬる

御制歌

はまゆふの間や落て居てこの世の別れをなげくらん

権大納言義詮

かりそめのいろいろすさまじきはるの月雨の軍に居ながらこの世を

西行法師

彩指

さしのぼるさのつのよりはるかにおもひあはせしかぬる

常盤井入道前太政大臣

色よりもこの秋しるし紫苑の花のもとにまつはしめ

康資王母

彩賀古

吹風も身のうすき秋なれば

源通能朝臣

白露をうらやましがる庶やすらん

後九条前内大臣

ものをうらやましがる庶や涯なるらん

権大僧都良春

ものをうらやましがる庶や今宵なりとも書さるべ

彩雲抄　秋鹿　参議雅俊

おりたつてもやまとふく鹿の打ちさとる秋の夕雲

彩雲抄　嵐山鹿　前右兵衛督教定

夕雲の山の月のうつるまで嵐の鹿もあはれなりけり

嵐山鹿の声を聞くとて　お大納言實教

いく秋か嵐の山の月を見て鹿の声

風　野鹿　前大僧正能憲

いく秋か嵐の山の春の月野やまの鹿の声

彩雲抄　鹿の声　藤原雅家朝臣

鹿よ鹿の声やまとふる世の花のほろびの声

同　従三位家隆

ひとつの夜の草の露の明ぬまとかつ山ふかき里の秋

彩雲抄　野の鹿　後藤減流九製

秋の風の花のしたをふく時鹿も今宵はまとをとふ

彩子　鹿　同

きくたびに袖をぬらすの夜の雲ゆふ時雨の声

彩雲抄　鹿　従三位為理

鹿の声山ふかき里の夜の雲ゆふ時雨の声

彩雲抄　鹿　従二位業子

鹿の声山ふかき里の月のこるあけの声

彩信

曉鹿　　前大納言為氏

清澄なる月の光りに山のあり明の空

月前鹿　　中納言為敎

小倉山秋ふかくなる月の光に

月前鹿　　前大納言經親

高砂の尾の上の月に峰鹿の

曉月鹿　　百首歌

夜明の月も明ぬる山の端に鹿の音

遠山鹿　　法眼慶融

彩子

松風の音とよりに清き高き

彩信

吹ぬるうらうらの琴の調に

関山遠鹿　　前大納言為氏

住吉の岸の花薄おのがしたをの音

田鹿　　養德院贈左官

伏見山ふもとの風に○この高き

秋風　　津守國助

彩子

ふるき雲に流れさき月新しき

野分梅風　　坂光山院内大臣

同

志ひらとりあるかぎりの秋の

国立公文書館
National Archives of Japan

彰考館 春秋風　　中務卿宮尊親王

雲かすみかきほの菊も色そへてかすゝの松の秋風

彰考 妹山曙　　前大納言為氏

明ぬるかすゝの松の雲はみてゆゑ人をのほる秋きり

秋朝風　　永福門院

うゝ宮の朝けの横色さひゆゑ生の高き秋の空

彰考 今朝の秋はすゝき風ちらくいとゝや秋を待ぬる　　後伏見院御製

秋月

月殘る門ゆ野の面の明方に霧の底うら白の明のき　　後二条院御製

秋夕　　宮道親王

とゝ日のぬ我身とうらこの里の久しく秋の夕暮

彰考 詠しとゝ世の秋と衣のゝ身よりて浮秋の夕暮　　前大納言為兼

一方に世のうくつきぬ秋の夕暮　　權中納言為重

彰考 うきこゝ雲何なるとの夕名とゝ秋のゝ夕暮　　侍從為教

世をしたゝ秋のゝ夕暮　　前大納言為世

風
遠村秋夕　　藤原隆祐朝臣
夕日さす遠山もとの里みえてゝあはれしく野への秋風

桐風夕亡松臺立蘭思蝉声満耳秋
前中納言定嗣
新拾遺
蝉乃声風のうちにみえて雲間の松の梢に秋の近き

蜂鶏　　九条左大臣女
風
今はとや鳴ねもよわる鐘の音乃浅ましき秋の夕暮

秋雨　　前大納言為兼
庭乃虫鳴もよわりぬ雨のよに加へて音はしきりなる秋

大蔵卿有家

新拾
日もくれぬ乃嵐の夕暮に立さる雲のまに雨すゝしく秋風吹

嶺山　　権大納言公蔭
風
夕日さす峰の山乃梢秋のひかりに紅葉のいろし絶す[illegible]

右大臣実氏
入逢の乃鐘乃まくれに秋さひしき雲にまかふ峰乃山乃端

藤原為基朝臣
立まよふ霧のしたみに雲のすそ乃松の梢に秋乃村雨

永福門院
山陰やまへのまかせに雲乃露かゝる[illegible]

院御哥

[illegible]

大義院澄技

影子 杉の[illegible]

秋浦

摂大納言義爾

影清書 霜[illegible]

姫野

新宮所院御匿

秋木

風

[illegible]

院御所

[illegible]

西園寺前内大臣

秋の夜雨よ[illegible]桐の葉[illegible]

前大納言為定

影子 姫田

[illegible]

中園八道前大政大臣

影抜 [illegible]

注三位為信

[illegible]

等持院贈左大臣

影清書 [illegible]

山田

花山院御製

雨ふる人を思ふ夜の秋の月

秋視聴

藤原為秀朝臣

風

夕ぬかの柳うら枯れて秋の日にあきの初風の色

儀子内親王

吟しかねて草花の露の玉

権大納言公宗女

姫百合のうつろに消て袖の露

祝部成茂

紅葉

旅衣ふる郷とて吉野山の秋の月

後伏見太政大臣

草枯れの末ふかき野の露の玉

月

晴子内親王

山の端にいでぬと思ふ夜半の月

前大納言為氏

袖ふるる松のうへの雲の月

藤原定宗朝臣

いつとても思ひ出らぬ山の月

大見流元方

秋をまつ雲の上の風の月

前関白左大臣 遍

小夜ふけぬ人をもとまる橋の戸を月ぞさしいる

法三位隆博

心なきあくの時雨にくもりなく月ぞ袖にのこるかなしき

清輔朝臣

雲ぬけてよいとしの宿雲晴まさる月の照渡るかな

後京極摂政

月のひかり照まさるかな袖の上に秋の雲

平宗宣卿

雲ぬけて月ぞ袖にのこるかな新しき秋の月

前大納言為兼

月の色雲ぬけてのこる秋の夜の風のよそふ袖の上

永福門院内侍

松風し宮ぬけきてふる雨に秋の月

見ぬ人の物思ふ袖をしるらんや月やあはれ秋の夜

西行法師

雲ぬけて月ぞ袖にのこるかな思ひ出ぬ我ぬ袖

前大僧正道玄

心なき月の光にうつる袖

西行法師

いつもきく麓の里と思へとも月はさやけき
庵にもる月の影こそさひしけれ山田はひたの音はかりして
前京極殿下
霧晴るゝをちの山もとはれて月影みかく宇治の川浪
太宰大弐重家
詠るの我衣手も山風にはらふ月やすみの夜半
右大将忠経
月見はと契りおきてしふるさとの人もやこよひ袖ぬらすらむ有明の庭
大蔵卿行家
新千
雲の上に今宵馴れぬる光にそへて月や天津乙女のかさしの袖
前大納言為定
天の原はるかに見えて姿よりいつくの山の月の影かな
後宇多院御製
秋の夜の光にまさる月をさそ見るなかき世の照しと
後醍醐院御製
みな人の袖の露にもやとるかな木の間の月
清輔
とみの家の代々の跡にもなかめやる雲の上の月
常盤井入道前太政大臣
長月の明ぬとも見えぬ空に残る月

吹かるる梅の花香は神やどる
山風すめる月の影
前大納言為忠

ひのくまの物とおもふ夏の梅の
よの月ふかくまつの戸
藤原為定朝臣

月をみるあるじ梅の花
ちるさとかくやかをるらん
源為氏朝臣

いくとせかこの宿の梅を
春の月ぞ昔の枝にかたる
前大納言為兼

ちるとなく春の雪とも
ふるさとの春の夜の月
前

駒とめて清水のほとりかげ
ぬるる梅の花の
贈従三位為子

ちるとなく春の雪とも
ふるさとの春の夜の月
前大納言為定

明ぬるかとおもふ春の月
梅の花
正三位藤孝

秋かぜ
千年の風の音
民部卿為敬

春の月
有明の月の
後京極摂政前太政大臣

春の月

新撰

進子内親王

秋風乃たゝぬもまたぬ村雲乃かゝるおのへを いつる月哉

前大納言為忠

中納言為兼

久しきを山の乃端や深めん いさゝかいてし月哉

左兵衛督為重

月をみて思ひ寝ぬるかなしさの 海かまとをいつくの浦とを海

二条院三河内侍

見はまの面のようかゝ海のよみ月やむ のゝ乃かゝ

権中納言公雄

雲乃ゝよりかゝ雲の間新しき月はとゝ

前大納言為氏

天原乃ゝかゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

為道朝臣

吹ゝゝ風乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

吉昭法師

月乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

和歌浦にて

後鳥羽院御製

雲きえて千里の空のかがみ山月にぞ秋の風ふきにける

和

後京極摂政太政大臣

山たかみ雲ゐにまがふ桜花散ぬる風のなごりなりけり

藤原成茂

津守国久

吹ぬるかぜのなごりにかすみ渡る春の夕の海の面

正二位成国

雲ゐにかぜのなごりをとどめてはいかに春の夕の海

源経氏

はるかぜにかすみ渡るなごりにはいかに春の夕の海

津守国夏

天原月のかたぶくまにまに春の夕の海

後二条院御製

はるかぜにかすみ渡るなごりにはいかに春の夕の海

[illegible]

従二位為信

[illegible]

菊原伊賀羽

諸[illegible]

[illegible]

前大納言為家

[illegible]

源頼春朝臣

[illegible]

前中納言[illegible]成

[illegible]

信實朝臣

[illegible]

正三位隆教

[illegible]

正三位知家

[illegible]

大納言成通

[illegible]

前大僧正景尊

河水のわりなき世にすむとも誰かは世の山のはの月

山階入道前左大臣

曇なき月も雲ゐのかゝる山のはにまたれてこそ見れ

鎌倉右大臣

秋風に雲の名もいはぬなかりせは雲ゐの月かくれなまし

参議雅経

ほのかなる山家の秋の月影にみえす千里のあり明の空

崇徳院御製

や

長月の月さへ今宵明の月のかけにはらくさき秋のいろかな

民部卿為家

旅月

新千

足曳の山のいはねになれて嵐のゆくへにすめる月影

前大納言為世

大井河はやせのいはつ旅のよを月の影にかゝるしら浪

土御門院御製

舟人もかつらの月の影にみやこにおつるせゝのしら玉

儀子内親王

旅風月

風

風にはおつる草葉の露わけしものを神の離によそに秋今宵月

前中納言季雄

秋月

君かすむ八重の宮にかけてあかてもなにを月

後鳥羽院御製

嵐の山路かけし峯に出て明すきにける夜の月

平貞秀

おもかけは今もみえけり姨捨の月より誰の涙くもらん

前大納言為世

ちりにける紅葉の数は木のまに残る松の葉みえて有明の月

月出山

法皇御製

新千

雲かゝる夕越山とおもふより今宵もこえて出る月かな

従三位経有

新拾

たちよりも光ありける影さえて松原深き秋のよの月

後伏見院御製

待月

風

声たつる軒の松風庭の末の雲かけて月やまちけん

従二位家隆

雲間待月

新拾

月まつと人にはいはし偽のはれやらぬまの夕雲の空

伏見院御製

新千

鳴をさふ嵐も月に晴れぬへき夕つかたての村雲の空

院御製

見月

風

我をのみ待よ涼しき月に思ひ出る今宵も

前大納言基良

雲はるゝ高嶺にかゝりみなみ分やる月に心なりけん

民部卿為明

月前雲

新拾

松の梢の雪もとけて月光はさして時雨の

新拾遺

月前風

山の雲も山のたえまに成て月はあらはれ嵐の谷の梢に雲の八神の心もてはやすらん月哉

後伏見院御製

新続古

雲をとゝ空はふるあの月はとゝ庭の梢風

月前梅風

前中納言公福

新子

鳴ふる雲はよ月のあるに神て時雨の嵐梅風

月前松風

前参議為実

新拾

見渡せは山のたえまに雲とはは月は松の風の音ばかり

新子

色のこぬ竹の葉ゝに月はあらはれて雲をとゝめぬ時雨の

月前竹風

後鳥羽院御製

ゝ神竹の葉ゝに月もあらはれ嵐の音

月前竹

前僧正道昭

新拾遺

仰ぎ見ぬ八重の雲ゝに月はあらはれて清き光の月の影

月前雲

伏見院御製

月前旅

風

清見ゝ潮をかけしく旅の夜の月をきてうん

月前旅

永福門院内侍

新続古

梅の月山の峯に雲たゝ岡の月はきゝ

月前梅

前関白

宣太后宮大夫後成

霧間曉月　　前中納言秀雄

有明の月をまちつる夢みてし　雲間の月の梅が山風

前大納言実教

夢千

夜をこめて尾上の雲の後きて　花新しきさくら時雨

夏後月　　前太政大臣後深

鳴くなり嵐の風の雲晴て　有明の月

順徳院御製

新撰御歌

秋霧の雨の上の雲消て　梅の香ぬれる月の

山月　　前大納言為氏

三笠山の月猶みてし　梅花の香ぬれる袖の

夢千

足引の山端きよくすみ渡て　雲ぬけ出る月の光

後西園寺入道前太政大臣

天津空きよき秋の夜の月　雲の上の風の山の端

後西園寺入道前太政大臣

君の住ぬる山をおろして　月の光をみて

山端入月　前右大臣

夢千

久方の月の光の清き夜に　山の端ぬけて月は出ぬる

前参議雅有

ようやくに雲ぬけ出る月の光　西園寺前内大臣

深山月　後鳥羽院御製

住吉神社の前を流れる川の岸に立て

前大僧正

彩花抄　嶺月

雲ぬける嶺のうへの月新しかりけり

法印澄弁

彩繪　杉月

いくよ経ぬ郭公鳴きそめし杉本の松月

伏見院御製

彩花抄　山路月

誰の文月ぞ山の入る神の心を

藤司院師

彩子　野月

山の時雨ふりすぎて月出でぬ

順徳院御製

彩繪古　月

文よりも月ぞ鳴き初めし郭公

權大僧都尭孝

彩子　野月

月ぞ雲ぬけ出でぬ時雨ふる

皇太后宮大夫俊成

彩花抄　野月明

思ひ出ぬ鳴きそめ初めし郭公

前大納言公任

彩子　野月明

詠ぬ月ぞ鳴きそめし郭公

法皇御製

未だ絶えぬ千種の野の草の花

彩繪古　月

文よりも月ぞ鳴き初めし郭公

權大僧都尭孝

彩子　野月

月ぞ雲ぬけ出でぬ時雨ふる

順徳院御製

彩子　野月

月ぞ雲ぬけ出でぬ時雨ふる

皇太后宮大夫俊成

彩花抄　野月明

思ひ出ぬ鳴きそめ初めし郭公

前大納言公任

彩子　野月明

詠ぬ月ぞ鳴きそめし郭公

法皇御製

未だ絶えぬ千種の野の草の花

新後撰　野月の源氏

萩原や霧を帰風ふく秋ゝ月　如願法師

湖月

湖の戸ゝ秋ゝ月ゝ月ゝ　前大納言公信

橋月

新後撰　藤原信実朝臣

[illegible]　[illegible]

水上月

新千　前大納言為家

月ゝ[illegible]の水ゝ[illegible]

新後撰　詠人不知

水ゝ[illegible]

水上橋月

新後撰　二条太政大臣

池水ゝ[illegible]

前大納言実氏

水邊月

新後撰　冷泉前太政大臣

[illegible]

池上月

新千　冷泉前太政大臣

池水ゝ[illegible]

山陰の道を

新千　藤原為氏朝臣

[illegible]

荷葉

[illegible]

新千

海月

山階入道前内大臣

月澄て天てる月の影のつゝみ秋の今宵の名をまつ

江吟

河月似氷

後京極摂政前太政大臣

出雲路の神代の昔ながらの河の月

新續古

海晴て河風冴む月さえて氷に有明

月清き二夜の月さえ冴ゆる山の井の水

前大僧正慈鎮

梅花院入道内大臣

月影の宮の松の根の白妙の玉に砕ける波の風

江曉月

長夜もあけぬるかとまつ程に有明の月

高倉入道前内大臣

海月

源親長朝臣

玉藻潟神代の月の影ながら長き夜の明ぬ塩の色

新千

湖月

右大臣

月の出ぬと見るまの浦の底の月

新古今

安芸内侍宮

鏡山くもる時なき月なれば見るかゝ曇る志のなかるらん

新續古

後法成院内大臣

海月

月清き志賀の浦なる海の月の月の影

湖上月明　　参議雅経

廣澤の秋の今宵を限りとて月ぞ浦風の音

浦月　　左大臣

月影のさしぬる時ぞ秋の色　伯耆雲

法京　経汲員

ひのくれぬる春ぞ来てなほ海月の影のまどかなる

左近衛権少将　　藤原

永夜の秋の松風ぞ海よりの月ぞ

海月　　御製

夕塩の満ちくるまでの秋の月

影千

立居の花のあれる浦風の吹くよりまする秋の月

西園寺入道前太政大臣

ひさかたの月の光の澄めばこそ

影信古

曇なき浪にく秋の月

源義経

牡鹿の月ぞ海の上の月

後小松院御製

海色月　　後鳥羽院御製

影千

ながめつる人はいまいく秋の月

松浦の月ぞ

侍従為親

北家前大納言

詠人知

今上御製

後鳥羽院御製

月

前中納言定家

海上晴月

前大納言為世

伊勢

中納言為氏

前京極中納言

塩屋月

藤原為衡卿

月漁火

藤原為衡卿

新千

渡月

法二位家

新拾

初月

左兵衛督

新拾

禁中月

為道朝臣

新拾

水辺月

前大納言為氏

新拾

津守経国

新拾

前大納言實教

新拾

雅中納言雅縁

新拾

源俊平

新拾

藤原定家朝臣

月前

風

山家月　　前摂政院御方

山里の月もいかなる人なれば　すまはすれてをとこ坊かな

院御方

深山の秋の藤の花の咲かぬ　月やわが袖

山長月夜　　前中納言為季雄

雲ぬけて影澄まる山の松風よ　秋はなれぬ月かな

新撰　　因幡家見月　　後鳥羽院御製

箱根の山の山の峯の松の梢　月さえわたる月の光

因幡家月　　左衛門院小宰相

物思ひて眺めし月やみなれぬ　秋の夜の月

新撰　　因幡家暁月　　仁和寺宮品親王守覚

明けぬとて宵より月の入るを　いまは門田の鳴る時也

松間月　　惟宗光之朝臣

山風に吹かれて松をもれ来る　月にかすかに音ぞ聞こえる

月恋歌　　後光厳院御製

月ゆゑ宮ぎ出でぬ恋すれば　松の梢の秋の夜の月

月多遠情　　源有家朝臣

ひさかたの月の光の遠ければ　思ひやるべき秋の夜の月

秋天象　　西園寺前内大臣

月のみ見れば星もひかりもなく　秋の空やなにてをしの月

風

皇太后宮大夫俊成

新拾遺
在明月

杉乃板まあらみわれは有明の月みけるそこ志のはし

前大納言為兼

風
鹿

鹿のなく夕の雲霧しくやとは時雨によるの枕なりけり

藤原為名朝臣

草葉末も鹿のなく声も霧のうちにまさる空のきりたにし

後京極摂政前太政大臣

明月まて逢ふとちもなし峯の鹿もなくなるみやまのふもとの里

従二位家隆

かけよはる秋のまてこそ見えされ鹿のなくなる志のゝ原

関駒迎

源義将朝臣

相坂や志水にうつるかけもみえ関路のこえてるゝかけ駒

駒牽

花園院御製

むらくも井にひく駒のまたも西の方やきさらに月つ駒

風
鴈

前大僧正道玄

こえ行の雲路の胡風に山を初雁の鳴渡るかな

伏見院御製

浮雲をかきわけてこえ翅よりさきに月の夜中に鳴わたる今

新続
藤原雅冬朝臣

今こそあれ枯野にかける人の初雁のこゑもしらて来にけり

御制歌

雨ふりと月にみるまちくらやあと雲ふかしの初月の影

前参議藤實治

小山田をてらす稲葉の夕月あかりてふく風の音ぞ秋なる

訂按抄

きりぎりすなくなり秋の夕月をかたぶけてなほ鳴ぬ

前関白　大閤

いく千里ほとゝぎすなき井の秋毎ふるとゝ鳴ぬきあり

坂上是則

ほとゝぎすなくとゝ鳴ぬきあり

宝鏡院殿太閤

ほとゝぎすなくときてきたるゝ秋風ぬ来ふきなるゝ夜かな

訂按抄

秋きりぎりすよるなきなくこゑ月ふかくなるゝ夜かな

民部卿為明

新千

ひぐらしなくなる時分の秋風ぬ初雁の声

秋雁

為道朝臣

凡

初雁ぬ声ぬ秋ぬ夕ぬ初雁

後鶯朝臣

夕初雁

前中納言隆長

新千

月ぬ夕ぬ秋風ぬ山ぬ端ぬ初雁ぬ

遠を初雁

前大納言為氏

我門ぬ田かりぬ初雁ぬ

暮山遠鴈

小倉山ものちの人相ありあの鴈の行方の合

従二位家隆

暁方山の遠方の山ぎわ雲よりあらはれ初る月の声

八夜閑鴈

西行法師

影絵

かすみ羽よりかくれ初めしてあけぬる時の暁

暁月

三条公忠朝臣

訂千

明ぬるか雲のみねの海ゆく舟の跡なき

霧中月

従三位為信

凡

雲ゐ行く秋の月のかげの底に初霜の一夕

後伏見院御製

天津風雲の路吹とじよ乙女の姿しばしとゞめん

霧間月

前左兵衛督為世

影絵

秋霧の八重よりかくる山の端を声もとゞめて行く鶴

濃霧

前参議雅有

みなもとの風夕堀江のさゝ枝に入江の波の寒

田上月

源頼之朝臣

影絵

ぬしやたれ田面よりつる月の舟ぎわ

雲

権中納言為重

立ちそふ雲の峯にたゞ来て海のよりあひの月

彩格

朝雪

山里に雪をあさぎりの鹿の音聞くまでは

雅中納言通俊

山朝雪

彩格古

今朝しらぬくるその色も高雲の下より消ぬる山風

雅中納言雅綱

鄙雪

津の国のなにはの雪の雪ならぬ花の春

摂津国守親宣

山の雪

朝嵐雪をはらはぬ松の色に深きを知るや

前大納言為忠

伏見山雪の消ぬる山陰に田面の雪の消ぬる

前大僧正寛尊

海辺雪

八潮路の松の一ふしにうもれぬる雪の

前左兵衛督為成

難波の浦に雪降れば芦の葉の

二条院三河内侍

彩格古

しらゆきかさなる雪の音すなる竹の

後鳥羽院九条

湖上暁雪

志賀の浦や遠ざかりゆく波の間より

山中秋月

彩十

小倉山峰の梢さ木の葉なき

前大納言為氏

秋宮　　今上御宇

八月うつるかぜの音乃松の露もさそはぬ袖

機衣　　民部卿為定

衣うつとそ乃里人今なれてそ衣と聞ハ秋乃ふる

新千

鶴乃声ハ雲ゐ遠ひて夕ゝ乃ちとりよ衣うつ

かゝ

昭慶門院一条

ふるさとハ秋乃ゆ乃ふ乃ちとりよ衣うつ

法皇御製

夕乃ゆ乃ふ乃ちとりの初音ハ衣うつ

山鳥乃秋乃ふ乃ゆ乃ふ乃ちとりよ衣うつ

權僧正良聖

ふるさとハ秋乃ふ乃ゆ乃ふ乃ちとりよ衣うつ

百秋門院

ふるさとハ秋乃ふ乃ゆ乃ふ乃ちとりよ衣うつ

前関白

ふるさとハ秋乃ふ乃ゆ乃ふ乃ちとりよ衣うつ

寶篋院殿御百

新後拾

月乃影ハ音もかくれぬ袖乃ゆ乃ふ乃ちとりよ衣うつ

進子門院

衣打乃袖乃ふ乃ゆ乃ふ乃ちとりよ衣うつ

長秋の有明月もみな夢も強る樹のうら夜ぶ
ふるひとをまつも碧りは未そもかかるみ夜うら
前関白太政大臣
権中納言為重

四よ夜、このはそ知てこの方ともうら海ふ夜
頓宗法師

海の我太政大臣

彰子
長さ秋の月の夜を打倦て行ゆくるる海ふ
正二位経朝

彰子
夜のしら知よ、ひのさ秋さ秋
夜打倦て行ゆくるる海ふ
[illegible]

彰子
おきてゆく人の心のかよひ夜てしら知ぬ秋
藤宰相為家

風
秋を知ぬ行ふ人はの秋ふ知ぬてうら夜ぶ
猪名太政大臣

彰子
月の秋ふ知ぬ行ふ人はの有明月ふ夜ふ
中納言為家

風
秋を知ぬ行ふ人はの秋ふ知ぬてうら夜ぶ
権中納言具行

彰子
星人の猪の音ふ行ふ月や秋ふ知ぬ行ふ人

後鳥羽院御製

閑居の夢も月もかれかれの月のよはの衣打声

前大納言為定

おくかはて月みる庭のあさちふにもしほれはてゝ千衣打

新拾　徳大寺右大臣

何よとて半のけぬる月影よはのつてに人乃衣打らん

新千　海辺擣衣　藤原宗泰

こゑそふ也神代の風にそふなれはあまのとまやも衣打也

新続古　里擣衣　権中納言雅世

浦風もふけゆくよはのこゑや何ときけ草の庵に衣打なる

几

擣衣何方　後小松院御製

かき京のよその衣を打音はいつ方からと里もさためす

擣衣　源持元

いく秋か旅ねてもふるき古乃浦苫屋の宿に衣打らん

九月九日　花山院御製

万代をつむともつきし菊の花長月のけふかさす人のため

重陽宴　山階入道前右大臣

長月の菊の盃九重にいくめくりかはあかさんかな

洞院前太政大臣

九重に八千世をかさねてかさしけりふりにし秋の今日の菊かな

家家僧侶相伴

九重よりかすかにてみやこ鳥のなくこえ

前大納言為家

新十六

立ぬ人なつかしの菊の露

權中納言師時

月

霜の袖とはしらるるは我宿の笹よりなれる白菊

詠人不知

新拾

長月の月の光の明ぬるにうつろひ行くはきくのなりけり

関白前左大臣

新拾遺

あるじしらぬ我宿の菊の花うつろはぬまにとはばこたへん

古御門院御製

誰ぬしのうつろふ袖にとめ初し菊の花たゝにたゝにうつろふ白菊の花

後光厳院内御製

菊籬月

うつろふとみるまがきの白菊の笹やの月の色ぞ冷

權大納言為定

ひとしなみ月もあはれをうつろふ菊の籬とぞ

後宇多院御製

千代ふるき菊の籬よりなるなれ人の初の花の

新千

秋山紅葉乃霧も
前大納言為兼
花ちらつてふきぬけ
伏見院御製
菊の葉乃色の夕風
庭菊
海殿胡院御方
百姿やけふ九重乃物ぬき
霜光菊
詠人不知
ぬきてまの物まりきを白菊
詠歌對菊花
花よりもれる霜やこれ
漆大寺左大臣
初霜乃をきもよそおきわたる
菊
大炊御門右大臣
菊道多秋
影抜
いくの千乃秋まとひ色もかつ
摂政院入道前太政大臣
影供花
花よりも色も今年乃秋
菊
秋霜
後伏見院御方
夕霜乃ふる
秋霜
冴
長月や
冴
冴二位為子
前中納言定房
初霜

訓抜古

鄭草歌拾

式部大輔有親卿

福爾乃山とてしまもたれまゝ嵯峨のたのゝてよ色の花

後京極摂政前太政大臣

凡

時毎つとよ乃雲八晴よ乃月日より乃光乃紅葉

紅葉

御制歌

新千

秋乃夜よ濃乃月乃光やこれもうくれそしてゝ秋乃雲

権大納言基忠

嵐乃元霧乃なかれ乃紅乃山のうしき八

後伏見院御制歌

所てゝ乃紅葉よ乃乃山八秋乃色

寄時霧

霧河毎ゝ乃おてゝ乃山乃紅葉よ乃ゝ

神祇伯仲

木間乃行ゝ乃河よ乃ゝ

前関白左大臣

花乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

訓抜

前関白左大臣

八重乃山乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

弾正親有親卿

水鹿よ乃鳴乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

大中臣頼基朝臣

新後古

秋の夜の月の影のすみのぼるに山の端をはなれてみるか

前左近衛中将藤原朝臣

二条院讃岐

雲間なく雨降りしきる夜の月の澄の影をみるかな

初見紅葉

権大納言為遠

おのがえだ色ぬるとはいふなれど雨の深山の色の紅

霧深紅葉

清人入知

白霧の立ちのぼりたるかとみるまで山の紅葉

中院入道前内大臣

雨ふる山の色ぬるとみるまで時雨もまれなるかな

晴日の日新雨ふる山の色の時雨もまれなる

前中納言清雅

新千

紅葉を千ちぢの深て霧の晴れぬるかな

前大納言為兼

新拾遺

初時雨ふるは日の見えぬ山の木葉の紅なる

八条院入道一品親王守

霧霜の色ぬる朝の秋の夕べ

柳本人麿

日ぬれて色ぬる雨の秋の夕べ

傾子内親王

紅葉も誰のみそぎと高山の嵐の外にあまるなりけり　　源宗国朝臣

風

冬くるまでひの景の神紅葉　　後宇多院御宇

紅葉変松　　法光叡院御創

新撰古

深山とて冬のあれの松の立ちかくれもなし

松間紅葉　　前大納言為氏

訂千

高山尾上の松の木のまより緑をくるる松のみどり

松紅葉　　前内大臣　実俊卿

新拾遺

深山なれば何毎を露もなし　　もみぢ　　松の松の松の

新撰古

紅葉深くいろ染の松の枝のいろかもあるかなもみぢ　　前大僧正義賢

松の葉の露も時雨もひまもなくいろ染の木の松の葉の

紅葉　　二品法親王道朝

三秋にあはれ色をもそへつるかな千ぢのもみぢ　　雅永朝臣

紅葉映日　　内大臣

日影にいまし時を深てそめる紅の筆の末かな

夕紅葉　　入道一品親王永助

新撰古

松風よ尾上の峰の音ばかりなる夕はこのもの

風

夕折紅葉　後福光園院前内大臣

山の端くまなく折かけて夕日の影の残れる

月照紅葉　侍従為敦

霜ふかき月を木の葉に残すとて

紅葉源水　権大納言長家

大井川山の端のもみぢ葉の流れよりなる

紅葉深水　大納言永信

嵐山のふく末絶えぬ大井川

紅葉　儀同三司

ご覧川山を分る色の

源義時朝臣

こゝろ世に望みなき山を庵はしめ中成宣や多国忠

前内大臣

もみぢ葉の色かとそれとみるまでに

紅葉留人　結城長綱

ちとせ経ぬ色の木の色にとゝまれる心しとゝ

行路紅葉　宣旨局実信朝臣

時雨の秋の山路に色をうつす錦やうつくしみらん

紅葉深　権大納言為世

雲山のもみぢ葉にて山ぢ行くもいとゝ分

国立公文書館
National Archives of Japan

仙家紅葉　　　　後入道前関白

君か代やあらんかきりの色みえて梢にしるし山の紅葉は

新拾
紅葉送秋　　　　中納言定輔

いつはりのなき世なりせは紅葉ゝも暮ぬる秋のまつ散らまし

暮秋　　　　後宇多院御製

長月や雲の色にも秋の行とも人のよそにも木葉散りつゝ

新続古
大蔵卿有家

今日のみと月も有明に惜まるゝ秋の名残の雲の空

寂蓮法師

暮ての梢の紅葉も山の端に月とともに秋の

探題信賀明

暮の秋さまにも枯野の花の色の外の紅葉の

暮秋雲　　　　伏見院御歌

夕日さす紅葉の秋の外にもなく雲の下にて外となる

後伏見院左京大夫

うら枯の浅茅か庭の霧よりもまた秋の残るそ

暮秋雨　　　　前大僧正覚実

庭の雨に荻の葉そよく音もなく秋の音

暮秋霜　　　　後醍醐院御製

新拾
紅葉の末葉にかゝる枯て霜にのこる秋の末の月

秋

あしたに花をもてあそびてゆふべに月をもてなす

九月盡　　前右兵衛督藤原朝臣

行秋の名残をしたふ人なれば

月と花とを風と音とにぞ思ひ乃ぶる

後伏見院御歌

新十

時雨をば袖にぞ分くる

前中納言為相

天津空なる秋をしぬぶ

右近中将義俊

いつこにか秋の別れを身をかへて

平政村朝臣

かはらぬ志なる秋の別を

大蔵卿有家

言とはぬ秋の別れを人ぞ知る

内大臣

詠法

ひとり思ふ袖の露をのこして

前大納言實名

詠法

ひとり思ふ袖の露をのこして

海辺九月盡

平経正朝臣

詠法

月ぞ思ふ袖の露をのこして

前中納言為冬

冬

初冬
初冬落葉
曉時雨
園時雨
尋常紅葉
河落葉
落葉滿水
杉下落葉
冬山霜

枯初冬
初冬嵐
朝可雨
可雨
落葉多
河上落葉
雨後落葉
落葉深
籬宮

初冬時雨
時雨
山時雨
紅葉
枯落葉
水上落葉
霜埋落葉
霜
常菊

庭鶴巢
石之音
夕之巢
千鳥
浦鶴
深千鳥
湖上水鳥
岩氷
湖氷
野分月

拓鄙
嵐音之音
之音
曉鶴
磯鵠
水鳥
氷
河氷
分月
湖分月

寒草
之音
之音前
江之音
海鳥之千鳥
濱千鳥
池水鳥
池氷
江氷
分曉月
河上分月

湖鳥分月
分雲
分歌
分雨
分声
野分霧
世雪物
初雪
雪仰雲
夕雪

之月
山家分物
分後
分地儀
豊明節會
分野霧
霰
策之戸前又河新雪下
晴雪
夕月映雪

水鳥之月
分夕
分庭
分動物
霧
雁鳥物
雪
湖雪
月前雪

海雪
山雪
節分雪
雪堤樵路
海雪
浦雪
禁庭雪
庭雪
名所雪
遠岸寒雁

杉雪
雪滿群山
節往雪
樵路雪
海色雪
水上雪
山家雪
林間雪
伏見雪
岸寒雁烟

杉上雪
節雪
行路雪
海色雪
海色杉雪
水上雪
閑居雪
常盤木雪
岸寒雁
焚火

年内梅
雪中寒菊

鍛冶
寒菊忘

老後寒菊
寒菊忘

冬

初冬

伏見院新宮相

草かれの高野の山のかなたより
雲にまがふ雪の夕暮

後西園寺入道前太政大臣

浮雲にまがふ雪のよかるまて
河面にしかぬ山の松

前大納言為世

訪千

音無て雪をいとふ山風も
今朝よりとしの夕暮

前大納言俊定

深雪ふる山の梢のかなしきは
夜ふかしてもとまらぬ

清水寺為

新拾遺
冬きぬと夕霜さえて紀の川ちかき杜の梢の風の音そさひしき
中務卿宗尊親王

新拾遺
秋よりも音はまさらて神無月わかぬ時雨やふりかはるらん
国光院入道前関白太政大臣

枯初冬
風
冬のきて霜のしたはもしほれにき枯もろき木の葉の下草
山階入道前左大臣

初冬時雨
新拾秋
袖ぬらし枯野の尾花もうちしをれて時雨を冬と定めつゝ
栄仁親王

初冬落葉
新続古
秋にしも松の梢の初しくれ音やかはらて冬はしらるき
清卿長寛

初冬嵐
新千
みなまくにさえつゝ吹ける嵐山梢まくにはさきてしかな
権中納言雅縁

時雨
新続古
たえしもさもきこえてふるなみしくれにゝは山の嵐冬やきぬらん
太上天皇

風
夕日さす落葉のうへに時雨ふりて庭よりすくる浮雲のそら
儀子内親王

山のはに浮ふ雲のたえまより月影さむき時雨也
従三位盛親

吹はらふ時雨の雲の浮雲にみえて夕日かけかくれゆく
前参議教長

時雨乃初分に成と山々紅葉
後京極院御製

新千
紅乃千志濃乃末葉深と
山乃井乃水乃底乃
前中納言實相

新拾
志ぐれ
一条内大臣

志ぐれ
前大納言公藤

御製

雨乃後雲乃きの定を見せ
昭慶門院御

吹よ乃風乃空に浮雲や
中納言為家

浮雲を
徳大寺実基

新拾
雲しの
前大納言為世

風よ約束を一ときの浮雲よ和歌の八幡宮山高海

源宣長

岡の松しの木の葉に音ハそれなれど何をかつ郭公

藤原為定卿

山風の吹うしなひて無浮雲ハ松の何をて

前大僧正道意

吹きたてゝ雲ハ紅葉しつゝ何を

今上御製

山ゝ何毎に吹かゝみて山の端よりうつる空の名残

宗久法師

雲の一ときの屋との雪よ吹うしなひて又山ゝ何を

必乗法師

暁の雨

うしなひて雲ハ月ハ持ちて初の海

二品法親王覚助

朝の雨

吹捨

木末ちる朝の風や吹うしなひて何を人の浮雲

山時雨

山ゝ端よりうつる雲ハ時雨ハ吹捨て何を

山之内入道前太政大臣

後鳥羽院御製

高山の雲の名残ハ松の木の梢ハ吹捨て何を

伏見院新宰相

国の雨

凡

ほとゝぎす所聞音して長宿せし国の杜まよはせてと云事歟

前大納言為忠

新拾

夢路まで来ぬ方所聞せぬほとゝぎす音信こ

中納言雅家

紅葉

新千

ちるとなく嵐の山の紅葉ゆへ八重の雲に桜有名

尋常紅葉

太宰大弐下野

凡

いく重風の吹せる紅葉を尋ねる山のひまゆゑ

前中納言有忠

落葉

新千

今よりは夜ふけぬとも嵐山の木ぬもを絡くちる

形部卿能忠

紅葉ちるかのゝ山の風ハ錦をそ吹かゝ

後宮内卿

橋姫のうへも錦と見るゆふ

山階入道前左大臣

新拾

かきくもりちる嵐ハ雲風ふきつまれて木ぬ間

源家任

新拾

山風の吹かとよ紅ちるれて木の葉ハ雲かゝる

前大僧正公朝

見渡せ山下風吹て分ぬ色いのこ木のえ

右衛門督信清

み山路なるならのおち葉をはらひきて枯野にさはく木枯の風
従三位為信

新拾遺
杜落葉
枝にのこる木葉をいかにはらふらん絶すふきぬる峰の松風
権中納言雅縁

生田河瀬々の秋はへたてゝ木葉をちらす枯野の風
後[illegible]院[illegible]

河落葉
夜の霜のおきあかしたる大井川色もてかへる紅葉
良心法師

新拾遺
河上落葉
清滝の瀬々の岩波木の葉をせきかへるみちの紅葉の
修理大夫顕季

大井河ゐせきにかゝる紅葉をそこのもみち葉みつゝなかめん
権大納言俊光

新拾
落葉浅
大井川水の流もみえぬまて落てつもれる木の葉なりけり
藤原為氏朝臣

新千
雨後落葉
山の雨晴つる跡の山風に露よりもろき木の葉なりけり
式部卿久明親王

霜埋落葉
庭の面に秋の紅葉をうつもれる木葉も霜にしほれはての
弾正尹光忠

松下落葉
吹風やよそにもしけき松の下庭にみたるゝ
太宰帥世良親王

風
木のもとによその夕日をはらひすてゝ嵐に松の色そのこれる
伏見院御製

落葉深
吹よせて木の葉の下にうつもれて庭の人めの絶る嵐の風の音
紀淑文朝臣

霜
残りつる峯の日影もくれはてゝ夕霜さむしをかのへの里
前大僧正源恵

霜かれの日影はよそにくれぬとも夕霜にうつる萩の下葉
賀茂経久

新千
落つもる庭のあさちは風さえてかれ葉にしろき霜の色
源益氏朝臣

梅かえにかゝれとてのこるつゆもかれてぬる霜の松葉に氷る冬の夜
俊頼朝臣

新後拾
住吉の千木の片そきゆきもあはて霜をきまよふ冬はきにけり
信実朝臣

冬山霜

新拾
とをちの松もうつろひにしき冬の日に夕霜はれて山の下草
惟宗光之朝臣

篠霰

新千
竹の葉に深山おろしはさそはれて一むらにふる霰なりけり
正三位経家

残菊

風
冬かれの霜の籬のきくのみそうつろふ色そまさりける
後宇多院御製

庭残菊

庭乃面に老乃友なる白菊の花の色

前大僧正慈鎮

新拾古　秋の色乃うつろふ節に成きてみまく欲しの孔雀の有り

同　寄草

ちらぬ我ものやうなるものや色に成る霜乃下草

新千　吹風乃音に花乃匂ひ来て庭に成る

権大納言実俊

新拾　菊乃花籬乃森の花なれば秋乃まくらに風ぞ吹

御制

限り有て秋乃名かくれぬ伊勢乃嵐よさめ〳〵寒乃下蔭

新拾遺　人目に花乃盛乃色に成て花乃盛に成る

祝乃成光

新拾古　風寒き秋乃夕乃面乃寒き

前大納言公種

世間に成る花乃盛に成る

無名法師

世間に成る乃節乃草に成る霜乃下れば冬に成る乃風乃

前大納言為平

志賀寺乃草に色乃霜乃下蔭や音に風乃花乃盛

新続古

嵐吹寒き夕

藤中納言公夏

同

あさちふや磯ろ繁木の梢にも紅葉ろ時雨

家集百首霜

新拾

かよふらむ河乃声よ霜さえて浦風ふかぬ明方乃月

少将実守

風吹ろ和歌乃浦乃遠乃夕日影ろ残ふ霜乃

権中納言通相

家集百首

同

難波かた入江ろ氷る夕日影明ろ乃月乃

光乃法師

澄乃ぬ月ろ乃しの海波ろ乃月乃葉乃ろ

遠三位雅家

新拾

難波ろ和ても寄ろ乃月乃葉乃ろ和ても浦風

権中納言為重

江家百首

難波江や芦乃ふし霜枯ろ乃て浦風ろ

千鳥

右京大夫弘補

同

あさちや郭鶏の濃乃濃風ろ夕波ろ立ふ

御制歌

新千

ひつ免て袋乃浦ろ乃て濃鶴我和も加ろ日ろ乃ふ

前大僧正賢俊

和歌乃浦ろ夕波鶴ろ乃ふ乃ふ方ろ乃ふ

正三位隆家

塩風より夕浪高く声々潮騒に潮騒也

権中納言為明

なみ高く塩干なるにしほかぜ吹て立鶴哉

前大納言為定

大海乃浪て立る浪を彩しそ千鳥

今出川前太政大臣

彩枝

名所絵に海の風浪乃景色月に潮騒也

法皇御製

明海潮干なる千鳥の鳴声ようかるさ有明乃空

正三位隆夏

中務卿宮尊親王

山乃方を出て海に流れ来て浪乃音とよ鶴鳴也

彩枝

御製

風よりる浪乃枝をいとひきて塩しやこゝと潮騒

寶鏡院殿太政大臣

と付面舟なる浪乃間乃音哉

後嵯峨院太政大臣

彩枝

今来て風寄をかけきあるとそ海の京は潮騒也

権大納言満親

文治六年六月廿日庚寅　鶴岡八幡宮

曉千鳥　後二条院御製

新拾

浦遠く行く末霞む海士の舟

満潮鶴　凡

入る潮の跡の白波乱れつつ

宗宣朝臣

新千

有明の月影冴ゆる霜の色に鶴の声

浦鶴　権中納言公雄

友鶴いたかるらむ浦の波

照法三位為子

新拾遺

浦風の吹き荒れぬと立つて浦風の吹き荒れぬと鳴く鶴

信人

新拾遺

玉藻刈る海人の乙女の浦鶴鳴く声に袖ぬれ

磯千鳥　左近中将親雅

風をいたみ波の白玉拾ふとや波の白玉

澄千鳥　正三位知家

浜伝ふ海人の澄の入江の千鳥

深千鳥　伏見院御製

正二位経朝

凡

夕等乃指風あらく吹て波高き時は

水鳥　門大臣

訓千

池水まさるふ波騒みて行衛定なきは

左大臣

訓作格

うき寝する物とやて池の水鳥

藤原雅親

訓作格

上羽をかはしてゝ羽をかはす鴛鴦

池水鳥　入道二品親王道助

訓作格

をゝ俺て池乃岸辺を立る鶴

後三位行能

中くゝ高き乃宮やこゝ乃人ゝ弘ゆゝ池乃ゝ

中納言為家

湖上水鳥

訓作格

岸島を漕乃ゝ出る小舟

後西園寺入道前太政大臣

氷

凡

行ゝ乃宮乃水乃ゝ氷を見ゝ未ゝ

恵助法親王

岩根の下水を絶て弘のゝ上をはゝふ氷乃

寺格院殿太宮

流を行ゝ為ゝ乃ゝ氷乃ゝ

風ゝ乃ゝ吹ゝ氷ゝ乃ゝ山川

桜蔭使英健

[illegible]

新拾

[illegible]

右兵衛督為遠

前中納言為遠

新拾代

[illegible]

藤原長秀

[illegible]

新拾古

[illegible]

源具親朝臣

[illegible]

後嵯峨院太政大臣

[illegible]

新千

[illegible]

池水

藤原信實朝臣

新拾古

[illegible]

岩氷

養德院殿右大臣

[illegible]

新拾

[illegible]

[illegible]

新千

[illegible]

江氷

源兼氏

[illegible]

湖氷

後二条院御製

彩接七

ちぎりをの山風ちるは小倉の山の月

後深草院御製

月

八

雲ゐなる月の光の明るをは

ゆくへ遠くすむ月をまつ

民部卿為朝

彩接

ちぎりをの秋の夜かすくれぬ

雲ゐなる神の山風をかすめ

信濃法師

信濃法師

ちぎりをの秋の月をまつ

前大僧正寛超

海ちぎりをの入海をかすめ

花の源より秋の月

説教成義

秋ちぎりをの月をまつ

後深草院御製

白妙の雲ゐなる月の秋の月

彩接

村雲の晴れて

後二条内大臣

村雲の晴れて月をまつ

順徳院御製

河面の雲の晴れ風を

彩接

月

月の秋の雲ゐの村雲をこゆりて

為山院御製

彰徳

[illegible]さ[illegible]そ[illegible]柏野乃[illegible]有明の月

[illegible]

[illegible]

[illegible]

凡

う紀爲行雲ゆきてくれて山より少日暮れ

微安門院

よ淀乃かと宮古(ゆ)て月乃あら村(ら)ゆ紀雲ゆ所時

民部卿爲家

新千

山家春朝

朝ゆ(ら)くかくれぬるを乃(て)も山路乃霞ゆ武ら位きく

春夕

凡

積よ夕嵐ゆて春ら日乃雪ゆ所時ゆ

伏見院御宇

山乃と武雪乃光よ春やて為ら日乃霞

西園寺入道前太政大臣

院御宇

新千

雪や乃ら思庭乃光ゆ雪ゆ

春夜

少ゆ(ら)あ積つ嵐乃所ら

春雜

時所ゆ嵐乃津てゆ二ゆ

春庭

志ゆ(ら)ゆ志ゆ積ぬ庭ゆ本葉ぬきて

伏見院御宇

おくれる堪ゆ

必然法師

雪ら本言志ゆれて乃ら山嵐よ少武雪ゆ久ゆ

伏見院新宰相

春夜

少ゆ(ら)あ積つ嵐乃所ら

春雜

時所ゆ嵐乃津てゆ二ゆ

方大納言爲兼

志ゆ(ら)ゆ志ゆ積ぬ庭ゆ本葉ぬきて

後伏見院御宇

志ゆ(ら)ゆ志ゆ積ぬ庭ゆ本葉ぬきて

伏見院御宇

を乃つゝかなる○乃草之を毛と毛之乃下に波を毛ちつ

雪

雪雨ハ拍節乃京よりちゝて山松風の音ハ世世

永福門院

右馬頭雅直義

地儀

足波を山本を比宮ゝ之ゝ乃ゝ之ゝ宮ゝ之ゝ一村

雨

動物

冬原為基朝臣

ゝく宮ハ神ゝまゝと乃明宮ゝ之ゝ指ゝを比乃ゝ之ゝ

聲

進子内親王

古ゝ比ゝ宮ゝこゝ乃ゝ乃ゝ宮ゝ之ゝ指ゝ乃ゝ晴ゝ乃ゝ之ゝ為ゝ之ゝ初声

豊明節會

後二條院御歌

彰考

三乃山ゝ比ゝ日ゝ毛ゝ指ゝ乃ゝ乃ゝ之ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ之ゝ

霰

前中納言為相卿女

宮ゝ内ゝ之ゝ宮ゝ付ゝ乃ゝ之ゝ山ゝ風ゝ乃ゝ宮ゝ之ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

前中納言實資

風乃音ゝ乃ゝ之ゝ乃ゝ乃ゝ之ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

權僧正永縁

乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

新拾

風をさそふ花の雪けはしかりけるかつく庭よりの雪

従二品親王 雅通

新拾

志賀の浦なみよせかけるかの雪ぶ

書陵部 従二位 藤大納言

桂にて雪の下折る蕨の萌もえくるしみよりの雪

雅大納言 資通

新拾古

春すぎて嵐吹そふ山の雪もかすみて

関白前太政大臣

篠の葉よりあらわれ雪の白玉のかずよりとまる雪の玉

左大将 公任

風をさそふ花とみるまでけてふる雪

鄙の雪

法皇 資院 従二位 前内大臣

春こそは鄙の山の風さそふ花とみるまで雪の玉

新拾

宮地やそ宿りの衣きるとも雪の玉

鄙の雪

前中納言 為綱

みわの鄙は草をかりとめて春の雪

雅

足柄すかる山路の岩の苔の雪

前大納言 為忠

[illegible]

新千

[illegible]

前右馬權頭定

[illegible]

權大納言忠季

[illegible]

八條前太政大臣

[illegible]

新拾

[illegible]

權大納言忠季

[illegible]

前大納言為氏

三鳥羽殿[illegible]

新拾

[illegible]

寶篋院殿[illegible]

[illegible]

源具氏

新拾古

[illegible]

後宮離院内侍

[illegible]

宗源院内侍

[illegible]

權中納言雅縁

[illegible]

水豊乃宮御[illegible]

栗

風[illegible]

雷

中[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

従二位藤原朝臣[illegible]

従二位源義行

[illegible]

[illegible]

[illegible]

みなもとの頼朝の書状を生涯に四度まで受領する天皇の山

あらし山朝夕雲の出でしかの矢田郡を付て与へ給ふ

等持院殿尊氏大臣

従二位為子

彩格

いとゝみ書よ語ふらんかの人の庭の雪

前大僧正賢俊

いまこそ行てみ吉野の花の山雪おもてくる庭の白雪

後西園寺入道実兼卿

月数ふる紀の国の山の松の葉の白雪

前大納言為家

彩格

矢田の郡より出て来る山風の吹ちらす葉、雪降るか

津守国貴

今朝、移る雲の袖とみるまで初雪うすく紀の庭

後深草院

紀の国の高野の山の雪の白雪

仲実朝臣

いせの海の波の音高き山の雪の通ひ来る

前参議雅有

彩格

ちる花、花ぬる、月ぬる、雪の庭の白雪

藤原雅経

[illegible]

[illegible]

[illegible]

訂板橋

曙雪　　龍山院海翁

ほのぼのと明る山の峯の白雪　　後伏見院御歌

朝雪

凡

なびかぬ雲を朝日のさしそめて　　後西園寺入道前太政大臣

鄙の山里雪ふる音せず

霽雪　　宗門院

霧ふかき明ぬ空の雪の朝ぼらけ　　覚善法親王

山ゐてて朝ぼらけ雪の長閑さに日の新しき雪

夕雪

山ぶかき夕ぐれの月の新しく成て夕雪みれば白雪　　前大納言為忠

雪埋て志ゐ〳〵ぬ竹の葉に風ふきて雪ぞ

訂正

夕月映雪　　前参議為尚卿

夕ま雪完もひかるまに月ぞ光ぶれ

月前雪

花と見る面影さへよそふ月の光ぶれ　　梅園使公敏

訂板本

雪後

雪後ひのさしぬ雪の白雪　　権大僧都覚孝

花乃ぶ雪のひかりとそみる　　沙雪

凡

松雪

山下風乃梢の雪を吹ふるひよりこそ松の下陰

前大納言為忠

松上雪

後山本左大臣

老の身のくるしひとやそとの雪をいくそくの松の心

前摂政

雪ふる風乃梢の緑もうつもれて雪をまとはぬ人の好

源定房

水鳥乃かも羽の白雪ふるとて松乃色衆も雪の下

源頼国

前摂政

ふる雪に風ふきうつる音をそ雪よりこそ松の上

摂家俊忠公歌

山雪

鳥乃羽の松乃あらしも音かよる山ふかの雪の音

永福門院

前摂政

かゝる雪の雪乃ふるとこゝろ乃山乃月乃晴るとも雪の音

藤原為之卿

久方乃雲の浦風ふきはらふ雪の音

雲間鶴山

前大納言親雅

ふく風乃やまの志ほ山をふるとも雪乃山乃

鄭雪

凡

雪の林の花ふるとの雪の音

内大臣

海底雪の初雪

八道二京記事写道

新拾古 立かてゝ雲ゐ[illegible]詠し[illegible]節八の[illegible]雲[illegible]

新拾 [illegible]

後嵯峨院御製

[illegible]雲[illegible]

新拾古 [illegible]雲[illegible]

節信雲

淳和院御製

[illegible]

前大納言實雲

[illegible]詠雲

八

[illegible]

[illegible]詠雲

[illegible]

後嵯峨

雪擬樵路

[illegible]雲[illegible]

源兼氏朝臣

新拾 [illegible]

[illegible]雲

前大納言雅氏

新拾 [illegible]雲[illegible]

[illegible]雲

[illegible]

[illegible]雲

[illegible]

新千 [illegible]雲[illegible]

後二条院御製

新古拾

元可法師

うつす筆ぬるみをこそ花ぬるまと人
雪に埋れて言葉なまし

權中納言為定

日ぐらし海の波のよせかへる
月の宮ゐの雪のかなたに

後京極摂政

海辺松雪

新拾古

雪山花月夜の乃松原
うもれて埋てはつめ数をつくす

後京極摂政太政大臣

浦雪

白波乃間ゆこゑのみ音ふて
雪にかくれぬ浦の舟人

小槻兼治

水上雪

諸岳よりくだる和い水の面よりきゆれ消るあわの上乃雪

源仲正

氷上雪

加つ氷ゆ氷のかたもあらはれて雪より底乃けゆ

後徳二位殿

樹上雪

朝ふく風のいろいろ変ぬれ白雪

後鳥羽院御製

白雪のゆかぬ所ぬ庭乃白雪

後深草院御製

新千

朝ふく風のいろいろ変ぬれ白雪

凡

山部雪　　基俊

雪のうちよりなほもとどこほれる山賤の煙人目なき宿

閑居雪　　法印清弁

新拾遺

山ざとは人の訪ひこぬ庭の雪のみ積もれば道もなきかな

庭雪　　御製

風まつとなほ残りける梅の花庭の雪にぞ春待ちがほなる

今朝まつもみぢ葉よりはらはらと庭の白雪　　後三位為理

雪のうちのなごりとみえて笹原に白雪　　大江

新拾遺

ふる人も枯風まてうゑそめし昔の友は雪の下草　　後二位為家

雪籠木雪　　大江

冬きてはいとどこのもとのつもるとも見えぬ雪の花かな

花雪雪　　曲撰法師

吹おろす風にもまれて散ぬれば松山雪の春ぞ待ける

象徴雅経

尋ぬる人に音なき三輪山杉の梢の雪に埋れ

法華経後奏文雪　　伏見院

新拾遺

里ひとに無言の雪のうもれすぎ　　俊成

俊成

凡

炭竈

前大納言為房

炭の海乃ゆきのまをうとあてゝ
ゆきのあとをたゝ
ゆきのあとをたゝ
ゆきのあとをた

新拾

前大納言資季

新拾

伊勢

新後拾

伏見院御製

源寿法親王

頓子内親王

前大納言資宣卿

法京寺通

新千

法京寺通

法京禅隆

前大僧正能憲

新撰拾

雷中菜言

光俊朝臣

世の人の身まさりなるを嘆くと雷も山ぶかの

嵐言抗

御剣衣

新後拾

今更の身の言とも坤の代いかきられぬ朝まの月

菜言愚

二条親王覚助

世の人の恨いろく〳〵なるあれからとなるや身の行方

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan